



かとう たくお
加藤 卓男
(大正六年生まれ)

事績

岐阜県土岐郡市之倉村 五代目 加藤幸兵衛の長男として生まれ、昭和十年、岐阜県立多治見工業学校(現県立多治見工業高等学校)を卒業後、京都の国立陶磁器試験所陶芸科に入所した。

すでに早くから父の指導の下、陶芸技法の基礎を幅広く習得していた氏であったが、第二次世界大戦が勃発し中国に従軍、陶芸活動は中断された。

また、昭和二十年、転属先の広島で被爆、その後十年間、療養生活を余儀なくされた。

やがて健康が回復した氏は、昭和三十六年八月フィンランド政府の招きでフィンランド工芸美術学校に留学中、夏休みを利用してペルシャ陶器研究のためイラン各地の窯場を駆け巡った。そして窯場に散在する七色に輝くラスター彩の陶片を見つけ、その魅力に取りつかれた。

以降、氏は、再現不可能といわれた幻の陶器ラスター彩の復元に取りかかり、十数回の発掘調査を重ね、持ち帰った陶片の分析・試作を繰り返し、二十数年の歳月をかけて、ついにラスター彩の再現に成功した。

また、三彩研究により日展特選北斗賞を受賞したのをはじめ、数多くの賞を受賞。三彩の技法で揺るぎない地位を築いた。

昭和五十五年、宮内庁正倉院より奈良三彩の復元制作を依頼された氏は、昭和六十三年に奈良三彩の復元に成功し、学術及び芸術文化に寄与した功績により、紫綬褒章を受章した。そしてその成果は、伊勢神宮第六十一回神宮式年遷宮御神宝の制作委嘱につながった。

平成七年、工芸技術分野における功績が認められ、国の重要無形文化財技術保持者(人間国宝)に認定された。

氏の特筆すべき功績は次のとおりである。

(伝統工芸の復元に関する功績)

[ラスター彩の復元]

氏は、昭和三十六年四月から十月まで、フィンランド政府の招聘により、フィンランド工芸美術学校に留学し、意匠技術の交流の任を果たすかたわら、休暇を利用して、かねてから興味をいだいていたペルシャ陶器研究のためイラン国立考古博物館及び各地古窯を訪ね、以後数度にわたりイランパーレヴィー大学アジア研究所に留学し、古代ペルシャ陶器について研究した。

この過程において、氏は、イスラム文化とともに衰退した、気品に満ち、最も高度な技術を要するラスター彩陶器に出逢い、世界で誰も手がけていないこの陶器の復元を決意した。そして、イラン・イラクの出土地・製陶地を二十三年の間に十六回にわたり訪ね、各地の資料を収集するかたわら、陶房では、窯構造・粘土・釉及び顔料の研究に二十数年の歳月を費やし、試行錯誤の末、ついにラスター彩の復元技法を完成した。

この業績に対し、当時のイラン考古学局総裁バーゲルザデー博士は、「往時をしのぐ世界的偉業」という激賞の言葉を述べた。

このようにして復元されたラスター彩の技法をわが国の陶磁器技術の中に開花させたことは、青磁・志野・織部などに続いて、ラスター彩陶器を日本の陶器として定着させていくものであり、その功績は偉大である。

[青釉の復元]

古代西アジア地方の焼物の中で最もよく知られた青釉は、ラスター彩とともに、久しく世界の陶芸界から姿を消していたものであるが、これを二十数年の歳月を費やし再び蘇生させたことは、世界的な快挙である。

以来、多くの陶芸家たちがこの技法を用いて作陶に成功している事実をみると、青釉復元の功績は大きい。

[奈良三彩の復元]

三彩には、唐三彩・ペルシャ三彩などがあり、わが国には唐三彩を源流とする奈良三彩がある。

奈良三彩は、遣唐使によってもたらされた唐三彩の技法を見習ったものといわれ、わが国における最も古い施釉陶器の一つである。それを代表するものに、世界最古の伝世品といわれる正倉院三彩がある。

氏は、この奈良時代に作成され、忽然と姿を消していった三彩陶器を復元するため、正倉院文書などの記録をもとに、坯土を求め、釉の研究を重ね、さまざまな問題点を克服し、昭和三十八年、当時の三彩陶器の復元技法を完成した。

この業績が認められ、宮内庁より正倉院御物のうち三彩陶器の復元を委嘱され、七十五点のうち、三彩鼓胴・花瓶・盤(大皿)・磁鉢の四点の復元にとりかかった。

復元の仕事は、創作よりもはるかに困難を極め、特に酸化銅については、八世紀当時の技法を踏襲しなければ、真に迫るものが得られないことをつきとめるまでに一年余を要する難事業であった。

この三彩陶器の施釉技法が、後に灰釉・緑釉・古瀬戸系施釉陶器・桃山陶などの施釉陶器の源となり、今日へと発展するに至っている。

また、再現・復元だけにとどまらず、その技法を、氏独自の芸術の世界に発展させ、格調高い三彩陶器を完成させ、美濃陶芸の中に、三彩の一項を復活させた功績は偉大である。

(陶磁器技術の研究に関する功績)

復元したラスター彩・青釉・奈良三彩の技法によって、氏は、昭和五十八年十月、岐阜県重要無形文化財技術保持者に認定され、父 五代目故加藤幸兵衛(岐阜県重要無形文化財[青磁]技術保持者)を継ぎ、美濃陶芸の伝統を継承することとなった。

こうした陶磁器技術の研究に関する功績は、深い学識と芸術家としての造形・描画の表現力を備えた氏のたゆまぬ研鑽努力の賜物であり、その成果はわが国陶磁史上、あるいは国際的にも価値の高いものである。

(国際芸術文化交流に関する功績)

氏は、昭和三十九年、国立近代美術館主催による現代国際陶芸展に招待出品して以来、日独交換展・メキシコ展・全米工芸展・ベルリン芸術展などに招待され、すぐれた作品の数々を出品し、国際芸術文化交流に果たした功績は大きい。

特にラスター彩の再現の成功によって、昭和五十三年、福田首相の中東訪問に際し、イラン国王に贈呈する「ラスター彩鶏冠壺」の制作を依頼され、昭和五十五年には、イラク文化省よりバクダット大学に客員講師として招聘され、西アジア諸国との芸術文化交流に多大な役割を果たし、国外でも大きな評価を得ている。

(陶芸指導に関する功績)

伝統の地場産業である美濃焼の復興に日夜励むかたわら、氏は、日展・朝日陶芸展・日本現代陶芸展に出品し、日展特選北斗賞など各賞を受賞するとともに、各種陶芸展の審査員を務めるなど、わが国工芸(陶磁器)分野の重鎮となった。

氏は、昭和三十九年に東濃地方における陶芸作家を集合させ、「美濃陶芸協会」を設立し初代会長となり、研究会・講演会・展覧会の事業を進める中で、身を惜しむことなく、自ら研究開発した技術をもって、きめ細かく後継者の育成指導に尽くし、多くの若い会員を育てた。日本伝統工芸展・日展・クラフト展などの各種の展覧会に入賞・入選を果たしている会員も年々増加しており、当地方における芸術文化の向上発展に貢献するところは多大であり、卓越した指導力は衆目の認めるところである。

氏は平成三年、会長職を辞任、後進に道を譲ったが、現在も社団法人美濃陶芸協会名誉顧問の職にあり、陶芸界の指導者として精力的に活動を続けている。

(陶磁器業界発展に関する功績)

氏は、昭和三十一年それまでの実績等により、市之倉陶磁器工業協同組合理事長に就任するとともに、県陶磁器工業協同組合連合会理事・日本陶磁器工業協同組合連合会理事等の要職を歴任され、同組合や連合会の運営・育成などに卓越した指導力を発揮し、生産の近代化や、伝統工芸を地場産業として確立させるため陶芸家やクラフトマンの育成指導に尽力した。この陶磁器産業界の発展に寄与した功績は顕著である。

(オリベプロジェクトの中心的存在としての功績)

氏はかねてより、織部焼について、そのデザインの奇抜さ・異国的雰囲気・自由闊達な造形などから、その源流は外国にあると考え、数多くの調査研究を繰り返し、ペルシャからベトナムを経て日本に渡来したルートを解明するとともに、ヨーロッパでは織部焼が持つ非対称(アンシンメトリー)が芸術様式に大きな影響を与えていると提唱している。

本県では、平成六年の古田織部生誕四百五十周年を契機として、こうした織部の精神・理念を「オリベイズム」と称し、これを現代に生かすべくオリベプロジェクトを推進しているが、氏は、平成七年十二月から平成八年三月まで県オリベプロジェクト実施計画策定委員会の中心的委員として活躍され、このプロジェクトの精神的支柱として欠くべからざる存在となった。

以上のように、氏は、英知と不屈の意志をもって遠く歴史の彼方に消滅した技法を再現し、次々と氏独自の創作を完成させ、芸術文化の向上に努めるとともに、果敢なる実行力と指導性をもって、後進の育成に全力を傾注し岐阜県のみならず世界の陶芸界の発展のために大きな功績を残した。

また、本県に關係する数多くの公職・団体役員として活躍し、県政の発展に大きな功績を残した。